

「元の理」の生物学的アプローチ

2020年2月25日、私は「教学と現代」で、「『元の理』の自然科学的考察と今日的意義」と題して講演をおこなった。その全体概要については、担当者の金子昭所員がまとめているので、そちら（本誌、本年4月号）をご覧ください。

この講演では、私の最終講義も兼ねるといことから、生物学的および環境学的視点から「元の理」の動物学的解釈を試みた。そしてその解釈は、たとえば男雛型の「うを」と女雛型の「み」は、前者がサンショウウオ、後者がヤツメウナギであると結論づけた。このように、講演では「十全の守護」との関わりの中で、どのような意味をもっているかについて紹介した。

ただ、本稿をまとめる契機となったのは、講演後の質疑応答の中でいただいた一つのご質問、「外国では『元の理』をなかなか理解してもらえないのはなぜか？」に関してだった。海外での布教伝道のさい、天理教における最も基本的な拠り所である「元の理」の解釈に、その原因があるのではないかと考えた。

1. 「元の理」に対するこれまでの視点

蔵内数太⁽¹⁾が、「教団内は別でしょうが、教団外では誤解がおこる可能性があります。外国人などには『古記』による教理の理解は特に困難でしょう」と指摘していたように、「元の理」には確かに誤解を生じさせる要素があると考えます。また、蔵内⁽¹⁾は、「この『元初まりの話』については、それは象徴的に表現されたはなしであると、よくいわれています。勿論それで悪いものではありません。あれは文字通りに解釈されるべきものではなくて、深い意味を具体的な事物によって説いているものです」と述べている。加えて、「いわば目に見える着物を着せなければ、無形なもの⁽¹⁾の伝達は出来ない」からだと考えた。

とくに、蔵内は、10種類の動物たちと「道具衆」との関係性を哲学的に考察し、「元初まりの話」については、「中山みきのみずから書いたものではなく、身近にいた人の聞き書きに由来するもの」として理解していた。また、「教祖はその書かれたものを見て『これでよいとは言われなかった』と言いますが、しかしそれで悪いと言ったのでもなかったようです。このことから考えますと、元初まりの話は、相手によって、時代によって、表現が変わって来る本質のものであり、或は内容が永久に展開して来るものであるかも知れません」とも述べた。これは、蔵内によれば、「元初まりの話」は、相手によっても、時代によっても、表現方法が変わるのが本質だ、ということの意味する。可変性のある考え方である。

一方、深谷忠政⁽²⁾は、「元の理」は「人間の創造と生成が説かれるのは、単に発生的な考え方を以て、現在の人間界の一切の事象を時間的系列の中に編成しようとする進化的思想—近代的⁽¹⁾精神を特徴づける特性の一つである—としてではなく、たすけの理話として、説かれてあるという点に注目する必要がある」と述べた。また「元の理は生物進化の仮説としてではなく、飽くまでもたすけの理話としてよくかみしめて味い、腹におさめなければならない」ともいう。これは、「元の理」を進化論、進化思想、生命進化の視点から考察するのではなく、あくまでも「たすけの理話」として理解することの重要性について説いた。

深谷の「元の理」は近代生物学の進化論的視点で解釈すべき

でない、という考え方は、蔵内⁽¹⁾の考え方とは異なっている。あえて言えば、前者は二者択一論的な思考であり、後者は象徴的表現を用いて全体の脈絡を推し量ろうとする思考だと考える。

いずれにせよ、本稿をまとめる契機となった「外国では『元の理』をなかなか理解してもらえないのはなぜか？」と、「ではどのように対応すればいいのか？」についての解答は、この中には見出せないのではないだろうか。たとえ象徴的表現であっても、「たすけの理話」であっても、とくに理詰め⁽¹⁾で理解しようとする人々には、納得してもらおうのは難しいのではないかと考える。

私は、これまでの研究の中で、「元の理」に登場する動物たちは単なる象徴的なものではなく、むしろそれぞれの動物たちは、特性、本性を親神様によって見定められたからこそ、引き寄せられたと考えている。まさに「性を見定め」られたからである。それゆえ、たとえば「かめ」は、“かめ”でなければならないのである。そのことは、「性を見定め」られた動物たちの生態学的あるいは行動学的アプローチも重要であることを示している。さらに、「八千八度の生れ更り」を理解するためにも、進化論的アプローチを試みる必要がある。とりわけ、動物学を専門とする私としては、願ってもないアプローチである。

2. 「元の理」研究の動物学的アプローチ

1993年4月、私は天理大学おやさと研究所に着任した。着任後は、教理研究を手掛けるとともに、前任地の博物館で手掛けていた両生爬虫類の生態学的研究と環境保全活動についても継続した。とくに、教理研究の中では『天理教教祖伝逸話篇』の環境学的アプローチのほか、『天理教教典』の「元の理」の生物学的アプローチも押し進め、教理と専門領域との兼ね合いを研究してきた。今回の「教学と現代」における講演は、それまでの研究成果を公にする願ってもない機会だった。

私は、『天理教教典』第3章に登場する水域性動物を分析して最初に気づいたのは、「うを」は魚、「み」は白蛇、「大龍」、「大蛇」のほかは「ふぐ」などの魚、「かめ」などの爬虫類で、私の学位（博士）論文の対象だった両生類が、まったく登場していなかったことを不思議に思った。動物の進化は魚類から両生類、爬虫類へと進化してきたはずが、なぜか「元の理」には両生類が省かれていたのである。むしろそのことが、私の「元の理」研究にスイッチを入れた大きな契機だったように思う。

私は、当時天理参考館で学芸員を務めていた上野利夫氏の協力を得て、『天理教教典』から「古記本」の分析へとベクトルの方向を変えた。そして18冊の「古記本」分析から、「うを」は両生類のサンショウウオ、「み」は脊椎動物でも進化的に最も下等とされる円口類（別名、無顎類）のヤツメウナギだったことを明らかにした⁽³⁾⁽⁴⁾。

これは、脊椎動物の中で最も高等とされる人類（人間）への進化過程、すなわち円口類から魚類、両生類、爬虫類へと向かう一連の進化過程が、「元の理」の中に示されているのではないかと期待感を滲ませた。

なかでも、男雛型の「うを」を解析することは、「元の理」の動物学的アプローチの本質を理解することと考えた。

そこで、「うを」がサンショウウオを意味していたと解析したその過程を、以下に示す。

中山正善⁽⁵⁾ 2代真柱は、「古記本」のうちの1冊、榊井本を用いて、「うを」は「ぎぎよ」であることを紹介した。そこで私、佐藤は、「ぎぎよ」がほかの「古記本」の中でどのように表記されているかを調べたところ、「げいぎよ」に収斂された⁽⁴⁾。これによって、「ぎぎよ」は「鯢魚」であることが明らかになった。

そこで、江戸時代の「鯢」「鯢魚」について研究を重ねてきた碓井益雄の労作から、その詳細が明らかになった。人見必大がまとめた『本朝食鑑』(1697年)、貝原益軒が著わした『大和本草』(1709年)、寺島良安が著した『和漢三才図会』(1713年)、明治以前に4回も重版された小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(1803年)、高木春山が描いた『本草図説』(1852年)などの書物には、「鯢」「鯢魚」「山椒魚」の文字が表記されていた。これは、「鯢」「鯢魚」「山椒魚」はすべてサンショウウオのことであり、一般庶民にも広く知られていたことを示している。言い換えると、動植物に関する百科事典がこれほど多く出版され、重版もされていたことは、幕末の頃の一般庶民も、このような本に読み親しんでいたことを示す証左ではないだろうか。

では、江戸後期の一般庶民は、『本草綱目啓蒙』や『本草図説』などの書物を、どこまで読み込み、理解していただろうか。

齊藤泰雄⁽⁷⁾は、「江戸末期において、当時の日本はすでに庶民層を含めてかなり厚みをおびた識字人口層をかかえていた。学校教育の普及が低迷していた明治初期20年代半ばまで識字人口層は、江戸末期とあまり変わらず、文部省の自署率調査によれば、識字率は最大で、男子で50～60%、女子で30%前後であったのではないかと推測」した。このように、幕末から明治にかけての日本人の識字率は、当時、世界で最も高かったことが窺える。このことは、幕末には武士のみならず畿内の農民や商人などの一般庶民は、普通に読み書きができ、書物もほぼ普通に読んで理解していたのではないかと考える。

深谷は、「我々は泥海古記が如何なる人々を対象としてなされたかということを見落してはならない。それは大部分が、おそらく海を見たこともない、文字も知らないような、而も古昔からの色々な慣習、口伝、俚諺を持った大和の農民を対象になされたものである」と考えていた。しかし、むしろ、当時の人たちの多くは、文字をある程度自分で書き、読書もできていたのではないかと、あるいは読み書きが不得手でも、知人の手助けを得ていたのではないかと考える。

3. 「虫、鳥、畜類」の進化的考察

『天理教教典』第3章「元の理」には、「その後、人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て」という表現がある。この部分を『天理教教典』の英訳版『THE DOCTRINE OF TENRIKYO』で見ると、「After that, human beings were reborn eight thousand and eight times as worms, birds, beasts, and the like」と訳されている。ここでは、「虫」の訳は「worms」となっている。確かに「worms」は、昆虫の「insects」よりも広義の意味での「虫」ではあるが、むしろ、回虫など寄生虫やミミズというような“細長い小動物”、というイメージが強いように思われる。辞書によっては、「ミミズト

カゲ」や「メクラヘビ」などの四肢が退化した爬虫類もこの「worms」の訳語となるが、それはミミズのような形態だからである。

実は江戸時代において、とりわけ江戸後期では、両生類や爬虫類は「虫」の枠組みの中に含まれていたのである。

江戸時代に広く読まれていた『和漢三才図会』(東洋文庫版)の「巻第五十二 蟲(虫)部」の説明の最初に、「蟲〔音は仲〕とは生物の微少なもので、その種類は大へん多い」と書かれている。これは、「蟲」は小型動物の総称を指していたと考えるべきである。

幕末の1857年、飯室昌翫⁽¹⁾は、「蟲」類を体系的に分類した本、『蟲譜図説』を日本で最初に上梓した。彼はこの本の中で、「蟲」を「卵生蟲類」「化生蟲類」「湿生蟲類」「鱗蟲類」の四つに大別した。狭義の「蟲」を表す昆虫だけでなく、広義の「蟲」、すなわち両生類(湿生蟲類)、爬虫類(鱗蟲類)などを含む900種以上の動物を、「蟲類」として『図説』の中に収録した。これは、幕末から明治にかけて、両生類や爬虫類も「蟲」の範疇に含まれていたことを示している。

すなわち、「人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て、又もや皆出直し、最後に、めざるが一匹だけ残った。」ということは、人間は、両生類・爬虫類(虫)、鳥類(鳥)、そして哺乳類(畜類)へと何度も世代交代を繰り返して、最後には雌ザル(人類へと向かう最初の“サル”)1匹が残った、という解釈となる。

これは、3億6000万年前、“陸上の住まい”を始めた両生類の祖先が、その後爬虫類、鳥類、哺乳類へと何世代にもわたって進化し、さらに700万年前には人類へと進化していったことを示唆している。この過程は、私たちが学校で習ってきた脊椎動物の進化を、まさに表現していることに他ならない。

深谷は、「元の理は生物進化の仮説としてではなく、飽くまでもたすけの理話としてよくかみしめて味わい、腹におさめなければならぬ」と述べているが、生物学徒の一人として考えるのは、「元の理」は、むしろ生物進化の視点からも十分に理解でき、また納得できる「たすけの理話」ではないか、ということである。

いずれにせよ、理詰めで理解しようとする欧米人に対しては、むしろ「元の理」の中の「虫」の部分を十分に補足説明していく必要があるのではないかと、そのことによって、結果的に「元の理」の理解度がさらに高められるものと確信している。

[引用文献]

- (1) 蔵内数太(1979)『泥海古記について 中山みきの人間学』赤心社:138。
- (2) 深谷忠政(1989)『教理研究 元の理 改訂新版』天理教道友社:159。
- (3) 佐藤孝則(1996)『泥海古記』に登場する生き物たち 1.“うを”についての動物学的考察『研究報告会報』天理大学おやさと研究所(13):35～47。
- (4) 佐藤孝則(2000)『泥海』—その発生的意義『「元の理」と地水火風～環境問題を考える～』天理やまと文化会議:69-83。
- (5) 中山正善(1957)『こぶきの研究 成人譜 その三』天理教道友社:159。
- (6) 碓井益雄(1993)『イモリと山椒魚の博物誌—本草学、民俗信仰から発生学まで—』工作舎:337。
- (7) 齊藤泰雄(2012)『識字能力・識字率の歴史的推移—日本の経験』『国際教育協力論集』広島大学教育開発国際協力研究センター 15(1):51-62。